Latvija
日本ラトビア音楽協会ニュース
第2号
（2005年5月1日発行）

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

第1回総会・懇親会開催

素晴らしい人たちが集まった！
夢の実現へ大きな一歩踏み出す

日本ラトビア音楽協会の第1回理事会及び総会が2005年（平成17年）2月5日（土）に東京・霞ヶ関三井クラブで開かれ、総会には会員など60余名が出席、協会の発足を祝い合い、今後の発展と実りある事業展開への期待を高めた。

総会後の懇親パーティでは会員が次々に登壇して期待・夢や決意を語り、プロアーティストたちがピアノや歌を演奏して会場を沸かせた。

《第1回理事会》

総会に先立って初の理事会が開かれ、熊谷直博会長以下13名の理事が出席して総会に提出する議案を審議した。

理事会は加藤晴生専務理事が進行し、冒頭、熊谷会長が「この会を楽しみにしていました。理事の皆さんにはご苦労様です。現在ラトビアもEUのメンバーになって、どんどん変わってきています。日本とのつながりもますます緊密になると思われます。この会をどう運営していくのか、皆様方の積極的なご意見とご協力を頂きながらやってまいりたいと思います」と挨拶して審議に入った。

総会に付議すべき事項について遠藤守正常務理事から、昨年出されていた規約案の一部改正説明があり、質疑の後承認。次に加藤専務理事から今後の事業展開の実務を行う運営委員会委設置が提案され、次の9名の委員と共に承認された。

加藤 晴生　遠藤 守正
関口 教和　工藤悠一郎
村山喜一郎　頴原信二郎
金岡 隆　田摩 勇
Mr. Olegs Orlovs

なお、昨年9月発足時に暫定就任した役員・顧問はこの第1回理事会で正式承認された。役員・顧問及び運営委員の任期は1年とし、次の事業年度の前まで運営にあたる。事業年度の区切りを何月何日とするかは次の理事会までに案を作ることとした。

次に遠藤常務理事が本会設立準備当初から2月4日までの会計報告を行い、頴原信二郎監事の監査報告の後承認、続いて平成17年度予算案を同常務理事が説明、これを承認して総会付議事項の審議を終了した。

ここで松原千振理事から当協会のラトビア語名称を定める提案があり、Orlovs氏が「Japānas Latvijas Mūzikas Asociācija（ヤパーナス ラトヴィヤス ムージカス アスツィアーツィヤ）」を提案、承認された。

最後に加藤専務理事が、本会の活動上何かと便利ということで、ラトビア・パレックス銀行に本会の口座開設を提案、これを承認して、理事会を終了した。

《総会》
議案を全て承認、夢広がる事業展開を目指す

引き続いて第1回総会が開かれた。関口教和会員の司会で、まず熊谷会長が「私はこの協会について何でもできることをやるつもりですので、皆様のご協力、ご助言を歓迎いたします」と挨拶。今澤哲朗会員を議長に選任して以下の議事の審議を行った。

第1号議案　規約並びに経理規定の承認（遠藤常務理事説明）。

第2号議案　役員、顧問、運営委員の承認と任期についての承認（加藤専務理事説明）。

第3号議案　本会設立に関してその経過の報告及び平成17年度の事業計画案の承認（加藤）

【内　容】

◇活動報告

（1）平成16年9月17日発起人会及び懇親会開催

（2）規約、経理規定の整備

（3）広報紙「ラトビア」の発刊運営委員会の設置

（4）ラトビア現地側との諸事業、行事の打合せ

◇事業計画

（1）広報紙「ラトビア」は年3～4回の発行を目指す。

（2）本協会のホームページを立ち上げる。

（3）本協会の法人化を研究する。

（4）日本とラトビアとの間で指揮者を交換派遣などしてお互いの国の歌を少年合唱団等に歌ってもらう。本年10月頃実現か。4月下旬詳細発表予定。候補指揮者は理事の松原千振さん。

（5）演奏家、演奏団体などの派遣招聘、公演などの交流促進に力を注ぐ。

（6）会員を講師にしての講演会開催～本会の広報と会員同士の親睦の促進を図る。

（7）ラトビアからの招聘等の実現が遅れるなどの場合は、日本国内の諸団体や個人の協力のもと国内で「ラトビア音楽祭」といったようなものの開催を図る。

（8）2008年の「ラトビア歌の祭典」への参加準備を始める。

第4号議案　当初より2月4日までの会計報告と平成17年度予算案の承認（遠藤）。

監査報告（頴原）

◇

いずれの議案も理事会提案の通り承認され成立した。

最後に藤井威副会長が、「ラトビアの音楽は本当にすごいものです。私も3年間の駐スウェーデン・ラトビア大使時代にラトビアには12回、45日くらい滞在しましたが、そのたびにリガや地方都市の音楽に触れて、その技術の高さ、ハーモニーのすごさ、リズムの正しさ、そして何よりも音程の正確さに驚きました。全国に240万人しかいない国なのに、あれは天与のものとしか思えません。これからこのラトビアとの音楽の交流を深めていくということで私も大いに努力したいと思っております。この会がどんどん大きくなることを期待して皆様とともにやっていきたいと思います。本日はありがとうございました」と締めの挨拶を行って総会が終了した。

【総会・懇親会出席者】（順不同）

熊谷 直博◇　松原 千振◇　稲山 輝機　今澤 哲朗
磯部 光正　岡村 喬生◇　野村 三郎　清水 實
長井 秀行　長井真佐子　長澤 護◇　百田 孝義
百田氏同伴者　小松原るな　水谷 鏡子　加藤 晴生◇
加藤 民子　遠藤 守正◇　田摩 勇　頴原信二郎◇
金岡 隆　徳田 浩◇　関口 教和　西川新八郎
ケイコ・マクナマラ　村山喜一郎　レディ・マークス寿子
ジャネッタ・スードニェツェ　オレグ・オルロフ
山本 徳行　清水 光子　石川 晴彦　迫 秀一郎◇
中嶋 勝彦　板垣 忠直　坂田 知子　岩崎 明子
クリスチーナ・オスモロフスカ（留学生）　オルカルス・ミカンス（留学生）
アルティス（留学生）　江藤 純子　久元 祐子◇　斎藤 哲◇
桜井 珊子　川合 修平　古市 吉秀　長谷川優進
宮地 和夫　鈴木 賢一　堀内 啓吉　吉田ラスマ
藤井 威◇　西脇 久夫◇　三巻 義夫　神郡 克彦
小林 幸雄　石川 了　石川 弥貴　滝澤 文一
中野 温未　花村 紀子　松本 嘉幸　山脇 卓也

（以上63名）◇印は理事会出席者（13名）

《懇親会》
素晴らしいスピーチ・パフォーマンスの連続

懇親会は総勢60数名が参加する賑やかな会になり、この会に寄せる会員の熱い期待が会場に充満した。

まずは藤井副会長の開会挨拶と乾杯の音頭で幕開けし、しばらく歓談ののち、ゲストの**小林幸雄大鵬薬品㈱会長**から、制癌剤の共同開発などラトビアとの仕事上のエピソードを交えてこの会へのエールの挨拶をいただく（別掲）。続いてラトビア最大の銀行パレックス銀行東京事務所長の**ジャネッタ・スードニェツェさん**（女性）が「本会にご招待いただきありがとうございます。パレックス銀行は2003年9月に駐在事務所を設立しました。日本に進出しているラトビアの唯一の企業です。これからもよろしくお願いいたします」と、結構難しい日本語を交えて挨拶し大きな拍手を浴びた。

ここで**岡村喬生副会長**が15分講演。「日本は文化において輸出する努力が足りない。日本ラトビア音楽協会が、日本とラトビアの文化・音楽を通じて交流を図ることは大きな意義がある」。時計を見ながらピッタリ15分（別掲）。

さらに次の方々が登壇して新しく生まれた協会への期待を熱っぽく話した

◇

レディ・マークス寿子さん（会員・作家、秀明大学教授）「ラトビアの合唱団・ジンタルスの演奏に感銘を受けて、この会に参加しました。あらゆるところでこの会を宣伝してゆこうと決心しています」。

石川晴彦さん（会員・出版文化国際交流会副会長）「日本の出版物を世界の国々に紹介する事業をしている中、現在EUにも加盟したバルト諸国に関心を持っている。本年度はリトアニアとの交流を図ることになっているが、将来的にラトビアの方々とも交流を実現していくつもりです」。

山本徳行さん（会員・ラトビア支援の会会長、[北九州] スウェーデン名誉領事）「ラトビアで行われる日本語弁論大会の優勝者を毎年日本に招聘し、3ヶ月間、日本語の勉強をさせている。毎年ラトビア支援のチャリティコンサートを開催しているがNHKが収録して放送してくれた。今年10年目に当たりますので、この音楽協会が立ち上がった記念に、九州で何かできないかなと思っています。日本にラトビア大使館を是非開設してもらい、ラトビアとの交流を正式なものにしたいと念願しています」。

◇

挨拶･スピーチが一段落したところで会員によるパフォーマンスの数々が演奏された。それぞれのジャンルで活躍する一流のアーチストたちの熱演に場内は感嘆の渦に包まれた。

ピアノ独奏　**久元祐子さん**（ピアニスト・会員）モーツァルト作曲「トルコ行進曲」（目隠し付き）。他の会員の手で厳重な目隠しをさせてピアノに向い、見事なタッチで弾ききって、会場割れんばかりのブラボーと拍手の嵐。

男声四重唱　本協会広報紙「*Latvija*」の**徳田浩編集長**（会員）と、**鈴木賢一さん**、**長井秀行さん**（会員）、**宮地和夫さん**（会員）。ピアノ伴奏・**江藤純子さん**。「城ヶ島の雨」「さくら貝の歌」を演奏。グリークラブ仕込みの重厚な中にも甘いハーモニーで会場を包んだ。

カンツォーネ独唱　**小松原るなさん**（会員・声楽家）。演奏曲「エンリコ・カルーソー」、ピアノ伴奏・江藤純子さん。歌詞はご本人の訳詩。カルーソー晩年の歌。“夏の暑い夕暮れにソレントの海に面した古いバルコニーにピアノを運ばせて最愛の娘に、最後の熱い愛の歌を歌い上げました。そのときカルーソーは喉頭がんに冒されていました。しかし彼の歌声はまだまだ力強く響き渡り、港の漁師たちも聞きほれたといいます。その後間もなくこの世を去りました…”という前説のあと、しっとりと歌い上げてカンツォーネの素晴らしさを堪能させた。

ピアノ弾き語り　**ケイコ・マクナマラさん**（会員・ジャズボーカリスト）。“百万本のバラ”の原曲であるライモンズ・パウエル作曲「マーラが与えた人生」を、もちろんラトビア語で弾き語り演奏。不幸を乗り越えて前向きに生きようとする少女の気持ちを、切々と、時には力強くダイナミックに歌いあげで深い感銘を与えた。

上から久元祐子さん、小松原るなさんと江藤純子さん、ケイコ・マクナマラさん

◇

熱い熱い3時間のパーティに、初対面の方々とは思えないような談笑の輪が大きく広がった。協会の目標の一つである会員間の親睦交流という面でも素晴らしく有意義な懇親会になった。板垣忠直会員（福島県芸術文化団体連合会副会長）の中締めの挨拶を行い、「会員一人一人がそれぞれの立場で協会の発展に寄与しよう」と結んだ。

制癌剤開発で ラトビア共和国名誉博士に

小林幸雄氏（大鵬薬品㈱会長）

モスクワの全ソ・ガン研究所へ訪問した時、総長の部屋にアンプルの試供品があった。私は薬屋なので総長の説明でそれがどんなものかをすぐ理解でき、ラトビアの有機化学化学研究所で開発されたことを知りました。その時はラトビアがどこにあるかも知らなかったが、私は大変興味を持ち、1968年の暑い時モスクワから夜行列車でリガの研究所を訪れた。

その後私は新薬の共同開発で10数回リガに行った。皆さん方の中でも一番多く行っていると思う。

行くたびに印象深く素晴らしい町。当時はまだソ連の一部だったので、人々の表情もどこか圧迫されたような暗い感じがした。しかし1991年独立以来人々の表情も明るくなり、パーティの席上でも素晴らしい歌が聴けるようになった。

「百万本のばら」がラトビアの歌と知らなかったが、現地の人々がハミングで口ずさんでいたメロディーが印象に残っていた。加藤登紀子さんが日本でこの歌を広めた時、記憶にあるメロデーで驚いた。その時初めてラトビアの歌であることを知った。

先週の大阪女子マラソンでラトビア選手が優勝するなど、ますますラトビアの知名度が高まってきた。

私ごとで恐縮ですが、抗癌剤開発成功でラトビア共和国から名誉博士号を頂いたことを付け加えて挨拶にしたい。

※　小林氏は1960年代の終わり頃、旧ソ連にあったラトビアの制癌剤技術に着目し、副作用が少なく効能の高い制癌剤を開発された。大手製薬会社が化学療法に見向きもしなかった時代に、それを見直すきっかけをつくり、癌患者の負担を大きく軽減し、福音をもたらされた。

日本は文化を輸出する努力が足りない

岡村喬生氏（副会長・オペラ歌手）

ラトビアの合唱は実に素晴らしい。私は長年のヨーロッパ経験でこのことを実感した。北はアンサンブルに強く、南は個人技に強い。良いオケは南にない。南はカルーソーに代表されるように歌でも個人技の伝統がある。

ところがラトビアの人は何万人集まってもキチンとハモる。アンサンブルに培われた正確な音程が身に付いている。

ところで、欧州ではトヨタ・ソニーを知っていてもジャパン、ヤーパンという国を知る人が少ない。世界の文化人500人の中に入ったのは浮世絵の北斎だけというのは寂しい。日本は文化を輸出する努力が不足している。わが国には、歌舞伎、能など世界に誇る素晴らしい文化もある。

私はラトビアとは直接関係ないが、協会設立に双手を上げて賛成した。文化を通じてお互いを知り合うことは大きな意義がある。数年前にウイーンで歌った時、ラトビアの人がたくさん来てくれた。

私は昨年「蝶々さん」を取り上げて、プッチーニの日本認識の間違いを直した。プッチーニが悪い訳ではない。要は日本の文化を知らなかったということ。今度は（自分の解釈による）魔笛をやることにし、4月にオーデションを行う。ピアニスト・歌手、いくら上手でもギャラは同じ。合唱はオペラのアリアか歌曲を1曲歌えばよい。皆さんもどうぞ。

オペラを通して物資大国のイメージを少しでも払拭したいと願っている。再来年は公の機関に認められて海外公演を行う予定。

『心底ラトビアという国に惚れ込んでしまいました』。

副会長　藤井　威
（3月4日・キワニス例会講演抄録）

3年間ストックホルムに住みスウェーデン大使でしたが、ラトビア大使兼務でした。ストックホルムからラトビアの首都リーガまで飛行機で45分ですが、これほど遠い国はありませんでした。ソ連の頚木の下で呻吟していた時代、バルト海はまさに鉄のカーテンでした。そういう状態から1991年に独立し、発展途上国ではありますが、その喜び方、自分達の文化を守り通したという自負は大変なものでした。心底ラトビアという国にほれ込んでしまいました。キワニスでも一度スウェーデンの話をさせていただきましたが、ラトビアの話を頼まれたのは初めてです。新興国の意気込み、活気、エネルギーを受け止めていただければ幸いです。エストニア、ラトビア、リトアニアがバルト三国です。1991年にソ連邦が解体し、この三カ国が独立を達成しました。三カ国の真ん中がエラトビアで、バルト海を挟んで対岸のロスラータ地方に大使公邸があります。ラトビアに関して読むに値する本は私の意見では2冊しかありません。それは私の「スウェーデン・スペシャルⅡラトヴィアという国」と、スウェーデン大使だったときの私の部下の黒沢歩さんが書いた「木漏れ日のラトヴィア」の2冊です。彼女はラトビアと日本語の同時通訳が出来る唯一の日本人だと思います。

◇

ラトビアは紀元前20世紀頃、インド・ヨーロッパ語族に属するバルト語系の言語を持つバルト族が移住、バルト海沿岸に広く分布します。現在バルト語系を話す民族はラトビアとリトアニアの2つしかありません。その他のバルト語系の派生言語はありましたが、全部他のインド・ヨーロッパ語族、つまりゲルマン系のドイツ語、北欧系のスウェーデン語、スラブ語（ロシア語とポーランド語）に負けてしまいました。消えていった中でラトビア語とリトアニア語だけが生き残ったと考えられます。

ラトビアが歴史に登場するのは900年頃で、バルト地域全域に多数の部族国家が成立します。キリスト教渡来以前です。1201年にダウガヴァ河の河口、現在リーガがあるところにブレーメン司教アルベルトがキリスト教を布教するために上陸したことから本当の歴史が始まります。帯剣騎士団というドイツ系の騎士団を連れて来ました。一種のドイツ民族の植民です。結局、その後裔であるチュートン騎士団のバルト支配が始まります。

1282年に騎士団の本拠地であったリーガ市がハンザ同盟に加盟し、自由商業都市として発展します。田舎はドイツ騎士団の大地主の政治が行われ、ラトビア人は全部小作人、リーガ市はドイツ系の商人が支配する自由都市でした。1558年ロシア・イヴァン皇帝の侵攻、1629年スウェーデン・パーサ王朝の支配、1700年にロシアとスウェーデン間でバルトの覇権をめぐって戦争が始まり、スウェーデンが完敗します。この勝利によってロシアのピョートルは大帝になります。1915年第一次世界大戦、1917年ロシアで革命が起き、その混乱に乗じてラトビアは独立します。なんと1918年までラトビア人は国を作ったことがありません。一回も国を作ったことがないのにラトビア人であり、ラトビア語を保存しました。

しかし、この独立はわずか20年しか続きませんでした。1939年ヒトラーとスターリンの闇取引でラトビアから北はフィンランドに至るまでロシア領、ポーランドとリトアニアはドイツ領という分割協定が結ばれます。その後ヒトラーがポーランドに攻め込んで第二次世界大戦が始まります。ロシアはラトビア、エストニア、フィンランドに攻め込み、ラトビア、エストニアはロシアに占領されます。その後は悲劇としか言いようのない抑制と圧制の下で呻吟するという歴史です。1991年ソ連が崩壊して独立を遂げたときの気持ちは我々にはわかりません。当事者しかわからないほどひどい政治の下に置かれました。

リーガ市内聖ペーター寺院（13世紀創建）のタワー頂上の展望台から旧市内を俯瞰すると、ハンザ同盟都市の佇まいが偲ばれます。ダウガヴァ河の橋のたもとにドイツ騎士団が本拠地としたリーガ城があります。現在では大統領官邸になっています。1997年リーガ旧市街を中心とする歴史的地域がユネスコの世界遺産に指定されました。

リーガ市中心部

◇

ラトビアはゼムガレ、クレゼメ、ラトガレ、ヴィゼメの4つの州で構成され、ラトビア語も少しずつ違います。1200～1900年の700年間一度も国を作れなかったため、4つの地方が別々の歴史をたどりました。例えば、ヴィゼメはスウェーデンの支配を受け、ラトガレはポーランドの支配を受けました。従って、クルゼメとラトガレの人々が同じ言語を話しているという認識はありませんでした。ラトビア族という民族としての意識が全然ない状態が延々と続きました。ラトビア語、リトアニア語はインド・ヨーロッパ語族と言われながら、ロシア語、ドイツ語、英語と全く違います。人口240万のうちラトビア人は現在60パーセントに過ぎず、ラトビア語を話す人は150万人です。その人達がこの言葉を700年間守り通しました。“我々は語学の天才だ”と何度も私に言いました。“ドイツ語、スラブ語などはインド・ヨーロッパ語の変化した姿であり、インド・ヨーロッパ語の最も古い形、本来の言葉に一番近いのは我々の言葉である”と言っていました。ラトビア語とリトアニア語はサンスクリット語に非常に類似しています。

◇

ラトビア語は独特の旋律、リズム、フィーリングを持っています。それがラトビアの各地にダイナという民謡を生んだ最大の理由です。4つの地方が別々の歴史を辿りましたが、ダイナという民謡だけがこの4つの地方にありました。これが19世紀に入り、民族運動に結びつく一つの大きな要因でした。それを最初に主導した人はクリッシュ・ヤーニス・バーロンスという人で、1800年代の終わりにラトビア全土からダイナの収集を始め、20万曲のダイナを集め、科学アカデミーに自分で作った手作りのキャビネットの中に保存しました。現在は120万曲に増えています。現代作曲家が作ったダイナを含めると、400万曲あると言われています。音楽という一つの芸術に民族の誇りをかけ、民族統合のシンボルになっていきました。1873年に第1回歌と踊りの祭典がリーガ市の郊外で開かれました。民族衣装を着て、それぞれのダイナを持って合唱団が集まりました。その時提示されたのが「神よラトビアを讃えたまえ」です。これが1918年に独立したときに国家になります。しかし、モスクワのツァー政府はこの歌を禁止します。その代わりにラトビア人が歌ったのが「風よ吹け」という歌です。これは飲んだくれの歌です。何で飲んだくれの歌が国家の代りになったかわからないと、ラトビアという国はわかりません。これは圧制と抑制から抜け出したいという希望の歌です。酔っ払いの歌とは似ても似つかない荘重な叙情的な歌です。

1991年に独立した後、有力政治家のライモンズ・パウルズが作詞・作曲した「マーラーが与えた人生」は、薄幸をものともせずに力強く前向きに生きよとする娘の歌です。マーラは豊穣の女神です。これを加藤登紀子は「百万本のバラ」という題に変えてしまいました。全く意味が違います。

◇

民族としてこれほどの不幸は珍しいと言われる時代を経て、1985年ゴルバチョフが登場して少し明かりが見えてきます。1989年8月23日、バルト三国をソ連占領に導いたモロトフ・ルッペルドロップ協定署名50周年記念日に、運命に対する世界の注目を集めることを目的として、バルト三国人民200万人が手をつないで「人間の鎖」を作り、この鎖はタリン（エストニアの首都）からリーガへ、そしてヴィリニウス（リトアニアの首都）へ500キロメートルにわたってつながった。この鎖は、バルト三国独立の願望を象徴的に示したのである。

（次ページへ続く）

（前ページから続く）

この鎖に参加したあるラトビア人は私に次のように語った。「600キロメートルの人間の鎖がつながったとき、どこからともなく『神よ、ラトビアに恵みあれ』（ラトビア独立時代の国歌）の歌声が沸き起こった。全ての人々が歌いながら泣いていた。歌声は途切れることなく、ダイナからダイナへと引き継がれた。人類史上初めて一民族の民謡が独立を世界に訴え、そして人類史上初めて民衆の歌声が一民族を独立に導いたのである。この時点で、“風が吹いた、歌声が風を吹かせた”と彼は言っているのです。結局、歌う革命になりました。

◇

1991年に独立し、1993年に第22回歌と踊りの祭典が行われます。その時はまだソ連の支配の名残りが色濃く残っていました。このときに北海道合唱団が参加しています。これはまさに独立と自由を謳歌する歓びの祭典であったと言われています。5年後の1998年に歌と踊りの祭典が開かれ、早稲田大学グリークラブOBでつくる稲門グリークラブが参加しました。4万人の大合唱がリーガ郊外の森に響きました。各地から集まったダイナの合唱団がそれぞれ自慢の民族衣装に身を包み、リーガ市内を大行進します。これは一見の価値があります。やはり自由は良いなと痛感します。

ラトビアは音楽をシンボル化するという世界で例のない民族だと思います。ラトビアの音楽の特徴は天才的なほど音程がしっかりしています。リズム感が素晴らしく、声が透明です。ダイナの合唱曲を聴くとあまりにも清潔すぎて面白味がないが、じっくり聴くとこれほど音楽的に高度の技術を駆使している合唱団はそうはいません。それが認められえて、ラトビア音楽はずいぶん日本に上陸しています。

1997年に北海道東川町ラトビア交流協会はスクリデ・ファミリーを招聘しています。その中のバイバ・スクリデはベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクールで優勝し、日本音楽財団からストラディヴァリウス（バギンス1708年製）を賞与されています。その関係でバイバ・スクリデはピアノのラウマを連れて日本に終始来ています。

民族衣装に身を包み、リーガ市内を大行進

稲門グリークラブは1993年にリーガ市大ギルト館で女声合唱段のジンタルスと協演しています。ジンタルスはラトビアを代表する女声合唱団で非常に透明な声を出します。

その後数回来日しています。

リーガ大聖堂少年合唱団はウィーン少年合唱団と似た組織で、音楽の才能ある少年達を集めて学校で音楽を教えながら、合唱団として訓練しています。3回来日しています。

けいこ・マクナマラはジャズのピアニストで、ラトビアで慈善活動をしています。彼女は「ラトビアのメロディの中に“お経”のフィーリングを感じました」と言っていました。サンスクリット語ですから、音楽家の耳にはそういう痕跡が残ったのだと思います。

日本ラトビア音楽協会は先ほどご紹介がありましたように2004年に発足しました。会長は私の二代前のラトビア大使の熊谷さんです。副会長は私とオペラの重鎮・岡村さんです。ラトビア大好き男達、音楽が大好きな人達、ラトビアと関係のある芸術家達が年間5000円ずつ払って集まっています。ラトビア音楽をもっと聴いてみたいという方がいらしたら、ぜひ日本ラトビア音楽協会にご参加ください。

（ふじい・たけし＝前・駐スウェーデン・ラトビア大使）

事務局からのお知らせ

松原指揮者のラトビア派遣

指揮者・松原千振さんラトビア派遣の指導先は、最近目覚しい活躍を続けているリーガ大聖堂少女合唱団に決りました。2006年1月17日から22日まで「日本のうた」を指導し、最終日にその成果を示す演奏会を開催することで合意に達しています。指導期間中、ラトビア合唱界の要人、指導者、音楽学校の教師・生徒などとも意見交換を行う予定です。指導プログラムは打ち合わせ中です。未だ契約上の若干の詰めを残していますが、当協会の本格的な事業の第一弾に相応しい密度の高い内容になりそうです。

6月にホームページ開設予定

広報活動の一環として、また会員の交流親睦を深めるために当協会のホームページを6月に開設する準備を進めています。一部会員の方から会員証の発行についてお問い合わせを頂いていますが、デザインの検討なども含めてホームページ開設に間に合うよう準備中です。

第1回運営委員会開催

4月6日午後6時から講道館内のレストラン“じぇびあん”で、運営委員の顔合わせを兼ねた第1回運営委員会を開きました。出席者は頴原信二郎、遠藤守正、金岡隆、加藤晴生、関口教和、田摩勇、工藤悠一郎、村山喜一郎の各委員と徳田浩広報担当で、オレグ・オルロス委員は帰国中のため欠席。

当協会の会員数も何とか100名を超え、本格的な活動のスタートを実感しています。この日の話題も、本年度の事業計画、運営委員の役割分担、名簿作成やホームページの開設など多岐に亘りました。

本年度中に待望のラトビア共和国大使館開設の動きがあります。本年は当協会創立一周年記念事業もあり、これとの関わりについて検討を急いで進める必要が出てきました。

松原千振氏のラトビア派遣交渉は、日程も決まって大詰めの段階にあります。このプロジェクトは日・ラ間の長期的な充実した草の根交流を進めるためにも、多くの方々からその成功が期待されているものです。松原氏派遣の次はラトビアの指揮者が日本に来て指導することになります。この受け入れ態勢を作ることも急がねばなりません。田摩委員が中心になって受け入れ可能な合唱団探しを担当してくれます。

運営委員夫々の役割は、当面、特に定めず、状況・テーマに応じてその都度、適任と思われる方に対応・担当して戴くことにしました。但し、名簿管理については、最近の個人情報保護に関する世論の動きに同調して、遠藤常務理事に担当をお願いすることになりました。会員相互間の親睦を高めるためにも、名簿作成は大切だと判断しています。当協会に相応しい名簿発行について、アンケートの形で会員各位のご意見を伺う予定です。

この半年間、当協会の会員集めに携わってきましたが、日本人にとってラトビアは未だ未知の国であることを改めて認識し、広報の重要性を痛感しました。ラトビアの素晴らしい音楽をCDにして配布し、PRに役立てて戴くことを検討しましたが、著作権等の問題もあって容易ではないのが実情です。昨年12月に*Latvija*第1号を発刊した後、新入会員数が伸びました。これを更に充実させる傍ら、ホームページを開設して広報面を一層強化します。ホームページでは、著作権法上許される範囲でホンのさわりだけでもラトビア音楽の紹介をしたいと考えています。広報活動はいろいろな機会を捉えて行います。

人材豊富な当協会にとって、講演会活動は得意な分野だと思います。3月5日キワニスクラブでの藤井威副会長の講演は好評でした。しっかりと当協会の宣伝もして戴きました。次は岡村喬生副会長の講演を企画中です。

会員の（個人的な）活動に対する後援をします。但し、これはガイドラインが必要になると思いますので、当協会の後援を望まれる方は事前にご相談戴きたく存じます。会員に対するラトビア語の指導及び現地情報の提供等も、当協会の大切な役割になります。当協会は非営利団体ですが、必要経費は各人に負担して戴くこともあります。

あれもこれも、ここでは書ききれないほどの話題がありました。運営委員の方々も、全員が、日本とラトビアの架け橋になって役立ちたい気持でいっぱいです。私も当協会の明るい未来を見たような集いでした。

（加藤記）

特報！
今秋ラトビア大使館開設

ラトビア政府は年内に日本に大使館を開設する準備を進めています。11月18日が同国の独立記念日なので、それ以前の10月中に開設される見通しもあります。当協会設立1周年を兼ねた、この慶祝にふさわしい慶祝行事を検討しています。

コンサート評

リガ大聖堂少年合唱団 クリスマス・コンサート

伝統にみがかれた発声、正確な音程…、聴衆に新鮮な感動与えた

二〇〇四年十二月九日、私と妻は、日経ホールで行われたラトヴィアのリガ大聖堂少年合唱団のクリスマス・コンサートを聞いた。このコンサートは、日経ミューズ・サロン第三一七回として計画されたものであり、同少年合唱団としては、一九九五年の初来日、一九九九年の再来日につぐ三度目の訪日であった。

人口二百四十万人足らずの小国ラトヴィアは、古くから音楽をこよなく愛する国民性で知られている。この合唱団は、特に音楽的素質に恵まれた少年達を集めて、中世教会音楽に始まる西欧音楽の伝統的技法を正確に受け継がせるためのきびしい訓練がほどこされており、伝統にみがかれた発声法、正確な音程、見事なハーモニーは、聴衆を魅了するに充分すぎるできばえであったと言えよう。選曲のあり方や指揮者の動きの少ない端正な指揮ぶりも、このような伝統のよさを充分にアピールするように設計されたものであろう。また、各パートから選ばれた独唱者たちのソロも、その素質と訓練の成果を控え目ながらも確実にアピールするものであり、一部に長旅の疲れも感じさせたが、そうであるだけに、音量をしぼって切々と歌うことによって聴衆の共感をよび起す技能もまた注目すべきものであった。

今回のコンサートでは、伝統的曲目を伝統的技法に忠実に歌い上げるだけではなく、会場をもりあげるための楽しい工夫にも見るべきものがあった。有名なクリスマスの歌をプログラムにもりこむほか、編曲にも工夫をこらし、例えば、誰もが知っているシューベルトのアヴェ・マリアの主旋律をバリトンに歌わせ、ソプラノやテナーにオブリガードを受け持たせることによって、聴衆に新鮮な感動を与えることに成功した。

またアンコールに応えて歌った日本唱歌「ふるさと」も、日本の聴衆を意識した選曲としてよくあるケースであるが、充分な訓練と練習を経た上でステージにのせたことが明確に読みとれる水準に達していたのはさすがであった。音程、アンサンブルなどの技術的水準はむろんのこと、日本語の発音も正確であり、曲の持つ意味も充分理解した上で歌っていることは明らかであった。さすがにラトヴィアを代表する少年合唱団だと思わせるできであったし、そのための努力に敬意を表せざるをえなかったのである。

（藤井威・前駐スウェーデン・ラトビア日本国大使）

リガ大聖堂少年合唱団

1950年、ラトビアの優れた音楽院「エミール・ダルフインヌ音楽学校」を前身に創設された。音楽監督ヤニス・エレンシュトライツのもと、国内はもちろんヨーロッパ各地で最も高い評価を受けてきた。1990年ラトビア国家独立に際し、800年の歴史を持つリガ大聖堂の伝統を受け継がせるため、この合唱団にその名を与えることを決め、1994年以降「リガ大聖堂少年合唱学校として、この大聖堂を本拠地としてさらに活躍してきた。1995年初来日、今回が3回目。教会音楽はもとより、多くの合唱作品をレパートリーにし、これまで14枚のCDをリリース。

13世紀に建てられたリガ大聖堂は代表的な旧市街にあり、ヨーロッパ最大級のパイプオルガンがある。

東京レディース・シンガーズ 32回定期公演

2月3日　紀尾井ホール
指揮／前田二生

前半が20世紀オランダ作曲家のアンドリーセン「三声のミサ」と、メンデルスゾーン作曲のラテン語による宗教曲「三つのモテット」、後半が邦人作品というプログラム。声の美しさは東京随一のこの合唱団は、前半のアカペラの宗教曲で抜群の透明さを聴かせて聴衆を魅了、人声の融合する美しさを堪能させた。

邦人作品は西村朗の若い頃の編曲作品「四季の抄」と、小林秀雄作曲の組曲「四季の山頭花」。指揮者の作品理解も含めて充実した演奏となった。（音楽の友5月号から抄録）

※編集子は12月20日に同ホールで行われた2004 Xmasコンサートを聴いた。冒頭に演奏されたブーランクのアカペラ曲「小さな声」を耳にした瞬間、正直言って“日本にこれだけ透明な響きと完璧な音程に支えられたハーモニーを持つ女声合唱団があったのか”と感嘆した。「山田耕筰集」「ベスト・オブ・ルロイ・アンダーソン」「クリスマス名曲集」には暖かさが充満し、とても幸せな気持ちで会場を後にした。

常任指揮者の前田二生氏は当協会会員。ウイーン学友協会主催のコンサートに16年連続出場するなど海外活動も多い。1985年に専門声楽家による東京レディース・シンガーズを

創設、海外を含む多岐な演奏活動を続けている。CDも多く主要な女声合唱曲は殆ど収録している。平成13年には芸術祭最優秀賞を受賞した。

くしくも前田氏は編集子と同年齢。早稲田で音楽に明け暮れたことでも共通し、若々しい旺盛な活躍ぶりをとても嬉しく思った。（徳）

会員短信

遥かなるリガ

石井洋一

リガを訪れたのは昭和52年7月だった。この年リガの合唱祭は、革命60周年を記念して国外の合唱団を初めて招いた。西の隣国ポーランドからワルシャワ工科大学男声合唱団と、東の隣国日本から姉妹都市神戸の市民合唱団コーロノーヴォである。これは関学グリーのOBと周辺の女子大合唱団のOGとで設立された若い団体で、指揮は関学OBの州脇光一氏。私は早稲田大学混声合唱団の出身だが、大阪勤務の頃で人の紹介で参加した。

リガでは一万五千人の大合唱団の最前列で1曲、市内パレードとレーニン像への献花、音楽院講堂での地元合唱団Ave solとの交歓演奏会など思い出は尽きない。

Ave Solは昨年3度目の来日を果たしたが、当時のメンバーは指揮者のコカルス氏だけ。しかしアンコールで歌われたソーラン節はかつて我々が贈呈した曲。メンバーが変わっても歌い継がれているのである。私は一人密かにほくそ笑んだ。

感動的だった日ラ音協との出会い「来年4月にラトビア訪問の予定です」

板垣忠雄
（福島県芸術文化団体連合会副会長）

BALTA GOYA SERDIENITEの楽譜を

お送り頂きありがとうございました。先日手に入れましたバルト三国合唱曲集選集Vol 13に収録されていた素敵な曲です。先日総会でお会いしたKeiko Mcnamaraさんから「Milion of Roses」の譜面とご自分が歌った見本のCDを送って頂きましたので、2曲とも早速歌ってみたいと思っています。ラトビア語の発音は難しそうですが（Keikoさんからカタカナで書いたものを頂きました）ロシア語よりは読み易そうだと…と話しておりました。

私は合唱団を6団体、吹奏楽団を2団体指導しておりましたが、昨年福島市音楽堂創立20周年記念コンサートのために、7つ目の合唱団「SCHLA CANTORUM HUKUSIMA」を福島市近郊に住む音楽関係者（声楽を専攻したピアノ教師や専業主婦、教員など）を中心に編成しました。演奏後解散するつもりでしたが、メンバーの希望で存続させることにしました。この団体を補強して来年4月にラトビアを訪問したいと計画しています。幸い先日お会いしたKeikoさんから駐ラトビア大使館の黒沢さんに繋いで下さるとお話を頂き、心強く思っています。総会に出席させて頂いたことを感謝しています。

1983年にブラジル国ベレム市で初めてリサイタルを開いて以来、ブラジル、アメリカ、オーストラリア、台湾、スペイン、サンクトペテルブルグと音楽を通した国際交流を続けて参りましたが、今回のラトビアとの出会いはとても感動的な出会いです。4月には73歳、音楽を通した国際交流も先が見えてきた感じですので、是非成功させたいと思っております。楽譜、ラトビア語、国内事情など分からないことばかりです。この協会以外に問い合わせをする方法を知りませんので、よろしくご指導をお願いいたします。

風呂本佳苗ピアノリサイタル

新春恒例のピアノリサイタルを、今年は1月8日（名古屋）、9日（大阪）、10日（東京）に「浪漫紀行」と題して行いました。どの会場も盛況でした。大阪で聴いてくださった音楽評論家からは、「美しい」としか云いようのない音色であり、「会場にいた誰でもが風呂本の構成する透徹した世界と対話していたに違いない」という趣旨の賞賛の言葉を頂きました。これを励みにして来春にはさらに良きものを皆様にお届けしようとロンドンで精進を続けております。

風呂本佳苗

書評

『木漏れ日のラトヴィア』

黒沢　歩著
新評論／定価2520円
評者・滝澤文一

「歌」で“民族独立”ラトヴィアの素顔描く

神よ　ラトヴィアを讃えたまえ
我らの愛しの祖国を
ラトヴィアを讃えたまえ
ああ、讃えたまえ

ソ連時代、歌うことが許されなかったラトヴィア国家の一節（著者訳）。

ラトビアという国名に、ソ連邦から独立（1991年）の契機となった「人間の鎖」を思い出す人が多いはず。日本語教師として首都、リガに渡った黒沢歩さん（現在、在ラトビア日本大使館勤務）が自分の目で見たラトビアの素顔のユニークなレポート。リガ空港に向かう機内で、スチューワデスから「どうぞ」といわれ、ハッとする下りは、評者も当地で経験したので、言われぬ親しみを感じさせる。実は「どうぞ」は、ラトビア語Dudzu（露語パジャールスタ）で、発音が「似ていた」のだ。

□

教え子、エリーザやその母親らに誘われ「キノコ刈り」へ出かけるなど庶民の生活を体験、ラトビア人が「生産的な自然との親しみ方をすること」も知る。遠い国で、日本語が熱心に学ばれることに、関心を持ち続ける。「漢字がおもしろいから」と言う生徒の言葉は興味深い。エキゾチックな印象で、漢字をあしらった食器が店頭に並ぶ。プールで、若い母親の肩に「命」と描かれた「いれずみ」（刺青）も見落としていない。

□

ラトビアは特異な民族構成の国。他民族による支配が入れ替わり続いたこの地に多くの民族が共生してきた事実も、しっかり押さえている。国全体では、ラトビア人58.6%、ロシア人29.6%。リガのロシア語系人口は60%、ラトビア人は少数派。病院にいくと、医者から「ラトビア語とロシア語のどちらで話しましょうか」と、尋ねられるという。評者も、ホテルのテレビ・ニュースを見た時、当地のテレビ局の番組は「ラトビア語で話され、ロシア語のテロップ（字幕）が流されているのを見た。モスクワ発のロシア製ニュース「HTB」はロシア語のまま流されていた。

□

「ある教師の記録」には、日本語学校で出会った朝鮮人、エレーナの人生を紹介している。エレーナが以前勤務していた図書館で「ここはラトビアよ。ラトビア語が解らないなら、出ていって」と言われたことを、聞き出している。望んだソ連からの独立が、ラトビア人と非ラトビア人に分別された現実。そして「私は〈難民〉になったも同然」とエレーナに言わせている。『帰化法』、『少数民族』などを含むこの項は、一気に読ませる。

□

「歌う人々」（第3章）も興味深い。夏至祭にビール、チーズを手に歌う人々。歌祭りでは、舞台と観客の6万人余が合唱する迫力に感動する下りは圧巻。「ラトビア人にとり、歌うことと踊ることは人生の日課」というのがうらやましい。しかし、最近の歌祭りは商業化、ショー化していると指摘する識者がいるという。民族独立へ燃えた暑い思いは忘れないでもらいたい。当地の女声合唱団「ジンタルス」の指揮者、アウスマさんと稲門グリークラブとの出会いが記録されているのもうれしい。

□

「生活者の目で、日本人にあまり知られていない国を紹介したい」という歩さんの願いは十二分に叶えられている。ラトビア人の歴史、人々の暮らしを含め、バルト三国を独立に導いた民族の歌の革命など鮮やかに描かれ、ソ連から独立後の現実を知るには必読。次作を期待したい。
（滝澤文一・リャザン国立教育大学講師）
※滝澤氏は元毎日新聞記者。総会・懇親会で編集子が偶然出会って驚いた。体を壊し日本で療養していたが、治療を終えて近く学生が待つロシア・リャザンへ戻る。黒沢氏の著書は「ラトヴィア」と記述しているが、滝澤氏の原稿は新聞用語「ラトビア」を使用。共に原文通りとした。（徳）
※筆者・評者とも日本ラトビア音楽協会会員

コンサート案内

第15回東西四大学OB合唱連盟演奏会

7月24日（日）13時30分
東京芸術劇場大ホール

新月会（関西学院グリークラブOB）
「バーバーショップハーモニーの世界」
慶応義塾ワグネルソサエティOB合唱団
「男声合唱組曲・沙羅＝信時潔曲」
クローバークラブ（同志社グリークラブOB）
「男声合唱組曲・御踊＝大島ミチル曲」
稲門グリークラブ（早稲田大学グリークラブOB）
「男声合唱組曲・水のいのち＝高田三郎曲」
合同演奏
「ふるさと＝磯部俶曲」他
S席＝3000円、A席＝2500円、B席＝1500円
お問い合わせ042ー586ー9236（稲門グリークラブ・前澤）
※この演奏会はコラム「琥珀」でも触れています。

桜楓合唱団 第36回定期演奏会

指揮
松下 耕　藤井宏樹　浅見佳奈子
ピアノ　前田勝則

①同声（女声）合唱のための
紀の国のこどもうた1
松下　耕　曲
②女声合唱団のための
C. ロセッティの4つの歌
木下牧子　曲
③女声合唱、クラリネット、ヴァイオリン、チェロとピアノのための「青猫」の五つの詩　（1996年委嘱初演）
萩原朔太郎　詩　西村　朗　曲
④白いうた　青いうた　より
谷川　雁　詩　新実徳英　曲

2005年10月8日（土）
13：30開場　14：00開演（予定）
すみだトリフォニー大ホール
JR・半蔵門線錦糸町駅北口徒歩3分

チケット（全席自由）2000円
連絡先　高仲　TEL 03–3339–3139
FAX 03–3339–3159
E-mail ohfu@mvd.biglobe.ne.jp
ホームページ
http://www5d.biglobe.ne.jp/~ohfu/

コンサート案内

コンサート“現代ラトビアの音楽”（当協会後援）

ラトビアの現役作曲家と、彼らの精神的支柱である女性作曲家・ガルータの作品で構成した2つの演奏会。

開催　2005年9月23日（金・祝）
場所　東京・武蔵野市民文化会館小ホール

第一部 室内楽の部　14：00開演
ラトビア室内楽・四つの時代～ガルータとサルガを中心に
ルーツィヤ・ガルータ曲：「祈り」、ピアノ三重奏曲「風よ吹け」
ソルヴェイガ・サルガ曲：ソナタ「永遠の対話」「人の苦しみの道」
アニトラ・トゥムシェヴィツァ曲：「翼」
グンデガ・シュミッテ曲：「小さな夢」
ペーテリス・ヴァスクス曲：「鳥たちの風景」
カールリス・ラーツィス曲：委嘱作品
出演者：甲斐万喜子、藤城敬子（以上ピアノ）、河西麻希（サクソフォーン）、安藤史子（フルート）、野村英利（ヴァイオリン）、任炅娥（チェロ）

第二部 オルガンの部　19：00開演
ヤルマクスの「惑星」と現代ラトビアのオルガン音楽
ロムアルツ・ヤルマクス曲：オルガン組曲「惑星」（全曲版世界初演）
ユリス・カルルソンス曲：オルガンのためのソナタ
ソルヴェイガ・サルガ曲：オルガンのためのソナタ
ルーツィヤ・ガルータ曲：パッサカリアとフィナーレ
出演者：浅井美紀、渋澤久美（以上パイプオルガン）

入場料　昼夜いずれも2000円（全自由席）
未就学のお子様のご入場はご遠慮ください。

主催　日本ガルータ協会・ゼメネ音楽企画（菊地康則・会員）
お問い合わせ　電話（菊地携帯）090－6018－8558
※当協会が後援します。会員の方は10%引きになります。事務局へお問い合わせください。

ラトビア便り

全力で邁進しよう!

エドガルス・カッタイ
（ラトビア日本協会会長）

日本ラトビア音楽協会が設立され、ますます発展の道を辿っていることは誠に羨ましく思います。それに対してバルチック海沿岸国ラトビアでは凪です。各界関係者は、医学的に言えば、昏睡状態に没頭しているのではないか？　私は医師ではなく、彼らの眠りを覚ませる方法を全く知りません。小生の活動分野は言語・文学で、体力・精力が段々衰弱しつつあるが、それにも拘わらず頑張っております。

ラトビア大学で人事異動があって、本人は又、教育職に戻りました。講座のテーマは「翻訳通訳の理論及び実践」。宿題は*Latvija*第1号の熊谷・加藤両氏の記事を精読してラトビア語に翻訳すること。なお、暇があって、私は今回、日本中世文学に眼を向けました。白羽の矢が立ったのは井原西鶴の「好色五人女」で、貴国の文学者の麻生磯次の現代日本語訳及び解説に基いて、ラトビア文に直しました。原稿が今、リーガの出版所で印刷準備中です。「本書は洛陽で紙価を高らしめる」とわずかの希望にひたる。

そしてこの間、中国文学にスイッチを切り替えました。実は私の門下生であったZaneちゃんは、中国の上海師範大学を卒業して中国語通になって2冊の本を訳しました。1「中国の諺昔話」2「中国の神話と伝説」で、Zaneの作業は原則として非難すべき所なき、しかし時々、大昔の中国の雰囲気に合致していない「超モダン的」ラトビア語を使っていました。小生はコンサルタントの立場から、もう少し「画竜点睛」して、上記の本がラトビアの青空に舞上って、無事に我が国の愛書家の本棚に着席しました。

最後に一つの秘密を漏らしたいのです。偶然に日本の作家である中津文彦氏の作品「ラトビアの霧」を入手しました。内容の面白い推理小説ですが、残念ながらリーガ市関係のページは「無理」が大分ある！　小生はこの本をラトビア語に訳しましたが、これからどうすれば良いのでしょうかと彷徨っています。

Derkevica先生のお嬢さん（コーラス・ジンタルスのメンバー）は小さな出版所を経営しています。その方へ叩頭しながら、足下に平伏して懇願すれば良いでしょうか？

いずれにしてもラ日交流のために尽力したいです。

悪筆・なぐり書きばかりですから、お詫び致します。

2005年4月21日　於リーガ市
春の吹雪の時

リーガで演奏会

早大グリーが今秋バルト演奏旅行

早稲田大学グリークラブが「日本に於けるEU市民交流年2005」を機に10月8日から10日間の予定でリトアニアとラトビアへ演奏旅行を行います。リトアニアでは400年以上の歴史を誇るヴィルニュス大学の女声合唱団「VIRGO」と、ラトビアでは同国を代表する女声合唱団「DZNTARS」とも交流し、合唱を通した国際親善を図ります。同クラブとしては11回目の海外演奏旅行で、バルト諸国は2回目です。

今回のレパートリーは全て日本の曲で、代表的な男声合唱曲や美しい日本歌曲の数々を紹介します。

指揮は同クラブOBのプロ指揮者山本健二氏と学生指揮者の大和田佳法。

募金のお願い

演奏旅行決定から実施までの期間が短く、資金的に脆弱な学生団体であるため、同クラブでは募金活動を

始めています。1口5000円で、2口以上のご協力者には、53回定期演奏会にご招待し、プログラムにご芳名を掲載します。この演奏旅行に当クラブも積極的に後援しますが、会員各位のご支援をお願い申し上げます。詳細は早大グリークラブ志摩雅史（電話090–9385–0362）へ。OB以外の方は日本ラトビア音協会会員であることを告げてください。事務局でも受け付けます。

会員各位から多くの原稿・情報をお寄せいただきありがとうございました。奮発して8ページにしましたが、全部掲載できませんでした。次号をなるべく早く発行します。（徳）

パレックス銀行からメッセージ

日本駐在員事務所長
ジャネッタ・スードニェツェ

約2年の間に、ラトビアと日本は文化的連帯のみならず、金融並びに商業分野でも関係を持つようになっています。2003年10月、パレックス銀行は、東京に日本駐在員事務所を開設しました。パレックス銀行は、日本で東欧よりの唯一の銀行であります。

何人かのラトビアの起業家や経営者は、日本ビジネスとの提携機会にこれまでもかなりの関心を示しております。パレックス銀行は喜んでラトビア及び日本の起業家や経営者に、助言とビジネス運営のお手伝いを致したいと考えております。

パレックス銀行は、日本での平均定期預金利息率より高い、競争力のある当該利息を提供しております。全ての定期預金より発生する利息所得は、ラトビアでは免税となります。定期預金の金種は、ラトビアのラットのみならず、米ドル、ユーロ、英ポンド、スイスクローネの他、特別に日本人居住者向きに日本円での定期預金も認められています。

パレックス銀行は、ラトビア国立オペラ劇場でのホセ・カレーラス演奏会をはじめとする、ラトビアに於ける文化諸行事、又、著名なラトビア作曲家ライモンズ・パウルズ、若くて才能あるラトビア青年音楽家を継続的に支援していることを誇りとしております。

我々は日本ラトビア音楽協会の会員であることを誇りに思い、又、本協会の活動・発展により二国間の相互関係が一層強くなることを願っております。（抄録）

琥珀

長い欧州経験を持つオペラ歌手の岡村喬生さんが「北はアンサンブルに強く南は個人技に強い。ラトビアの人は何万人集まってもキチンとハモる」と話したのが印象に残っている。田舎のオジサン、オバサンたちが、完璧無比な正確なピッチで合唱する光景は、羨望の的でもある▼西洋音楽の歴史は浅いが、日本人もアンサンブルに強い民族だと常々思っている。伝統の邦楽の世界では“ツレ（連れ）る”という言葉があって、例えば三味線でも、タテの掛け声とバチの動きに合わせて、何十人もの演奏家が寸分狂わず同じ音を出す。11人目の人は10人目の人のバチに合わせる。三味線は糸が微妙に狂ってくるが、絶えず糸駒に手を当てながら右側の奏者の音に合わせる。歌も同様で、タテに合わせて見事な斉唱（ツレ歌）ができる。三味線・歌のそれぞれ100人以上が、合同で演奏する催しがよくあるが、私も邦楽の世界に入った当初、“指揮者なしでよくこんなことが出来るな”と驚嘆した。日本人の誇るべき芸・技というべきだろう▼明治中期に西洋音楽が入って、日本人はハーモニーの魅力を知った。ここでも日本人はすぐツレ上手を発揮する。いち早く合唱を試みるグループが生まれ、明治30年から40年にかけて大学キャンパスでも、西の関西学院、同志社、東の慶応、早稲田に、ほぼ時を同じくして男声合唱団が誕生した。ツレる特技を持つ日本人はハモることも吸収上達が早く、昭和初期には全国規模の合唱競演会が定期開催されるようになった▼昭和27年、伝統の東西四大学男声合唱団が、東京で初の合同演奏会を開いた。以降、東と西が交互に毎年開催を続け今年が54回目、年間を通して最も注目を集めるアマチュア合唱演奏会として定着している。当然のように、この演奏会から大学の枠を超えた合唱仲間の友情が生まれた。昭和52年、この四大学男声合唱団のOBによる合同演奏会がスタートしたのは極めて自然の流れだった。こちらの方は隔年で東西交互開催。したがって東京開催は4年に1回ということになる。今年は7月24日に東京芸術劇場大ホールで開かれるが、ステージに立つ者も立たない者もワクワクする一日になる。今回は稲門グリークラブ（早稲田大学グリークラブOB合唱団）が当番で、当協会会員も多数出演する▼日本とラトビアが合唱音楽で接点を持ったのは最近だが、共にハモり上手な国民だけに、音楽協会が誕生して交流を深める意義は極めて大きい。1998年に稲門グリークラブがラトビア音楽祭に参加した時、他の三大学OBも数名同行したが、次の2008年音楽祭にはもっと多くの合唱団から大挙して参加できればと願っている。（徳）

日本ラトビア音楽協会のご案内

「バルトの民は歌の民」と言われます。ラトビアには伝承民謡の他に次々に生まれる新しい歌を加えると400万曲に及ぶ歌があり、これは同国人口の半分を占めるラトビア人一人当たり3曲という信じられない数です。

1991年にロシアから独立を果たし、ラトビアの優れた合唱事情が世界に知れ渡るようになりました。合唱を通じた日本との交流も急速に深まっています。私たちは、ラトビアの人たちが、人生の喜び、悲しみ、祈り、怒りの全てを、素晴らしい音楽に写し続けた偉大な歴史の一端を知ることができました。

クラシック音楽の世界でも、多くの優れた作曲家や演奏家が輩出し、ラトビア人は、自分たちの音楽が偉大な文化財であることに大きな誇りを持っています。日本でも愛唱されている「百万本のバラ」が、当時の同国文化大臣の作品であることも驚きでした。

国と国の真の交流は、人と人との草の根交流が不可欠です。遠く離れた二つの国は、こよなく音楽を愛する人が多いことで共通しています。

2004年9月17日、各界の方々の賛同を得て「日本ラトビア音楽協会」が正式に発足しました。当面、演奏会、講演会、親睦会などを通してラトビア共和国との交流、支援を深め、同国の合唱関連情報を収集、公開する活動を目指しています。第一歩を踏み出したばかりで会員数はまだ100名余りですが、大きな輪に広がることを期待しながら夢の実現に向かいたいと願っています。多くの方に加わっていただきますようご案内申し上げます。

入会お申し込み

【年会費】

正会員　個人5,000円　法人1,0000円

賛助会員　5,000円（個人･団体とも）

ご希望の方は、日本ラトビア音楽協会事務局（1面題字右に番号・アドレスを掲載）へ、ファクスかEメールでご連絡ください。入会申込書と会費払い込み用紙をお送りいたします。

会員の方々

（4月20日現在）

（氏名）	（県名）	（所属等）
安斎眞治	千葉	早稲田大学グリークラブOB会副会長
石井洋一	東京	早混稲門会
石川晴彦	東京	㈳出版文化国際交流会副会長
石川了	東京	東北新社／クラシカ・ジャパン
石原祥弘	千葉	早稲田大学グリークラブOB会
石坂廬	神奈川	笹川平和財団
磯部光正	東京	早稲田大学グリークラブOB会
板垣忠直	福島	福島県芸術文化団体連合会副会長
伊東一郎	埼玉	早稲田大学文学部教授
稲山輝機	神奈川	毎日新聞／専務取締役
今澤哲朗	東京	東京稲門グリークラブ／幹事長
岩崎朋子	東京	㈲巣巣／代表
梅原由紀子	大阪	コーロ・ヌォーヴォ
頴原信二郎	東京	早稲田大学グリークラブOB会
遠藤守正	神奈川	遠藤税理士事務所
岡村喬生	東京	オペラ歌手
小川翠	神奈川	邦楽演奏家
小山田安宏	東京	日本水路協会
オレグ･オルロフ	東京	パレックス銀行／アシスタント･マネージャー
加藤登紀子	東京	歌手
加藤晴生	千葉	平成ビジネスアソシエイツ㈱
角谷仁	兵庫	かどたに内科医院／院長
金岡隆	神奈川	早稲田大学商議員
神郡克彦	東京	長崎大学教授
菊地康則	東京	日本ガルータ協会代表
工藤悠一郎	東京	東京稲門グリークラブ／指揮者
熊谷直博	東京	(元)駐ラトビア日本国大使
黒沢歩	ラトビア	ラトビア語翻訳家
黒澤幸男	東京	くらしき作陽大学音楽学部教授
ケイコ･マクナマラ	東京	歌手
小礒明	東京	日本ラトビア協会理事長
耕納邦雄	東京	早稲田大学グリークラブOB会
小林晃	東京	日本大学教授
小林信一	東京	東京混声合唱団業務理事
小松原るな	東京	声楽家
斎藤哲	神奈川	日本経済新聞社社友
坂田知子	福島	スコラカントルム福島／マネージャー
坂場孝之	千葉	稲門グリークラブシニア会／幹事長
嵯峨山まり子	兵庫	魚住コーラス「わかくさ」指揮者
桜井珊子	東京	桜楓合唱団／会長
迫秀一郎	東京	サンルートプラザ東京総支配人
島田精一	東京	日本ユニシス／社長
清水卓爾	東京	東京稲門グリークラブ
清水信行	福岡	三井物産㈱／(元)常務取締役
清水實	東京	㈱アイラス／取締役
清水光子	東京	国立楽器
ｼﾞｬﾈｯﾄ･ｽｰﾄﾞﾆｪﾂｪ	東京	パレックス銀行／東京事務所長
白井克彦	神奈川	早稲田大学総長
杉浦保友	千葉	一ツ橋大学教授
関口教和	東京	稲門グリークラブシニア会
滝澤文一	ロシア	リャザン国立教育大講師
武内正	東京	武内公認会計士事務所
舘野美久	東京	国際臨海開発研究センター
田中宏	山形	日本の歌を歌う会
田摩勇	千葉	NHKエンタープライズ
筑紫哲也	東京	ジャーナリスト
辻田行男	埼玉	早稲田大学グリークラブOB会
土屋昌也	東京	稲門グリークラブシニア会
徳田晶子	東京	
徳田浩	東京	柔道新聞編集長
戸田智子	東京	
冨永侃	兵庫	早稲田大学商議員
長井秀行	神奈川	横浜稲門グリークラブ
中井弘明	東京	平成ビジネスアソシエイツ㈱常務執行役員
長澤護	東京	早稲田大学グリークラブOB会前会長
中嶋勝彦	東京	東京稲門グリークラブ
永田宏	東京	三井物産㈱／顧問
西川新八郎	東京	NPO法人顧問建築家機構
西原義弘	北海道	北海道東川ラトビア交流協会会長
西脇久夫	東京	ボニージャックス
野瀬一郎	東京	早稲田大学グリークラブOB会
野村壽子	東京	ホテル稲門会
野村三郎	ウィーン	メロス音楽研究所代表
橋本恵子	千葉	
久元祐子	東京	ピアニスト
藤井威	東京	㈱みずほコーポレート銀行／顧問
福井忠雄	東京	福井自動車㈱／会長
福田美保	大阪	女性指揮者の会／副代表
藤原桂子	兵庫	女性指揮者の会／代表
風呂本武敏	兵庫	愛知学院大学教授
風呂本惇子	兵庫	城西国際大学教授
堀内啓吉	神奈川	早稲田大学グリークラブOB会
堀俊輔	埼玉	指揮者
前田幸子	兵庫	神戸中央合唱団
前田二生	東京	指揮者
松原千振	兵庫	東京混声合唱団／常任指揮者
水谷鏡子	東京	㈲華のハーモニー
三巻義夫	神奈川	横浜稲門グリークラブ
三ツ松平	愛知	男声合唱団グランフォニック／団長
宮崎勝治	神奈川	(元)朝日新聞ヨーロッパ総局長
宮尾益治	新潟	新潟放送参与
宮地和夫	神奈川	早稲田大学グリークラブOB会
村山喜一郎	埼玉	日本エストニア友好協会
百田孝義	東京	東京稲門グリークラブ
八木昌子	東京	桜友女声合唱団／責任者
山本恭子	兵庫	コーロ・アロードラ
山本茂男	東京	稲門グリークラブシニア会
山本徳行	福岡	北九州スウェーデン名誉領事
山元淑乃	ラトビア	ラトビア大学現代言語学部東洋学科講師
山根秀夫	兵庫	神戸新聞会長
山脇卓也	東京	日本無線㈱／合唱指揮者
吉田ラスマ	埼玉	(元)外交官(ラトビア共和国外務省)
ﾚﾃﾞｨｰ･ﾏｰｸｽ寿子	東京	作家　秀明大学教授

◇

東京六大学合唱連盟	東京
東西四大学合唱連盟	東京、京都、兵庫
神戸中央合唱団	兵庫

◇

アウスマ　デルケーヴィッツア	ラトビア	ラトビア民族合唱祭名誉指揮者
エドガルス　カッタイ	ラトビア	ラトビア･日本協会会長
ダッチェ　アダムソン	ラトビア	ジンタルス指揮者
アイラ　ビルジーニヤ	ラトビア	指揮者

情報断片

○…松原千振さんのラトビア行きが具体化してきました。指導するリーガ大聖堂コーラス学校少女合唱団（RCCS）は、まだ創立8年目という歴史ですが、最近の急成長ぶりは著しく、国内のみならず海外演奏旅行でも高い評価を得ています。2001年のドイツ演奏旅行では、多くのメディアから“信じられない美しさ”と激賞されました。団員数は9歳から19歳まで84名、学校ではコーラスの他にソロ、音楽理論、楽器演奏なども学んでいます。将来のプロ音楽家たちが、松原さんの指導で日本の歌をどう歌ってくれるか、とても楽しみです。

○…ラトビア最大のパレックス銀行が東京に事務所を開設し、金融・経済面でも日本との関係が一層深まります。弊紙に長いメッセージを頂きましたが、紙面の都合で抄録にさせて頂きました。次号で詳報します。秋に大使館が開設されると轍の両輪が揃います。全ての面で日本とラトビアの交流が深まるとこは我々にとっても大きな喜びです。（徳）